

（２）校内外における研修および発表会

① ジャンモネ CoE シンポジウム 令和２年 12 月 22 日

本校 HR 教室において、本校 1 年生全員（320 名）を対象に、オンラインにて神戸大学ジャンモネ CoE ミニシンポジウムを実施した。当初は対面での講演会として実施予定であったが、新型コロナウイルスの感染状況を考慮して、Zoom を活用して神戸大学から配信していただき、生徒たちは各 HR 教室で講演を聞き、積極的に質疑応答も行った。講演テーマは以下のとおりである。

講演① 「地球を守ろう：誰もが安心して利用できる持続可能な新しいエネルギー」

神戸大学 SDGs 推進室長 先端融合研究環教授 喜多 隆 氏

講演② 「EU の環境・SDGs 政策」

神戸大学理事・副学長 大学院経済学研究科教授 吉井 昌彦 氏



<生徒の感想>

私は今回、エネルギーと経済の関係に興味を持ちました。SDGs の目標があるぶん、環境に考慮した行動を心掛ける必要が出てきて、今まで通りのエネルギーではいけないけれど、環境をとると経済成長の促進に影響があるといった問題があることがわかりました。政府はどちらも行う方針で話をしていますが、実際両方とると、また新しい問題が生まれてきたりして、困難なことになると思います。EU ではとてもたくさんの政策を行い、あらゆる角度から政府が積極的に問題に取り組んでいるように思えました。私は問題を解決するためには、もっと問題に対して国民の理解を得たうえで、より多くの政策を試していく必要があると思いました。

社会問題について、私は同級生の中でも詳しくなく、いつもこのような講義には“？”を浮かべながら聞いていました。しかし、わかりにくい部分を細かく噛み砕き説明してくださったことによって、とてもわかりやすく興味を持って聞くことができました。なかなか知る機会がないことを学べて良かったです。個人的には再生可能エネルギーを使うことで、逆に CO₂ が増えるという内容が印象に強く残っていて、今後生きていくうえで「とりあえず良いといわれているから再生可能エネルギーを」とするのではなく、本当にエネルギー効率が良いのか、CO₂ の排出削減に行き着くのかを考えていきたいと思っています。

② KOBE 研修

a 経緯

期 日	内 容
令和2年9月30日	説明会、応募用紙配布
令和2年10月30日	事前指導、各分野フィールドワークに向けてのアンケート実施
令和2年11月6日	医療分野事前学習（1） 代表3名によるフィールドワーク「神戸アイセンター病院」 アイセンター病院長、ビジョンパーク職員にヒアリング
令和2年11月6日	情報分野事前学習（1）
令和2年11月9日	ロボット分野事前学習（1） 講師：(株)ダイヘン 人事部採用・教育課長 杉原健朗氏
令和2年11月27日	医療分野事前学習（2）
令和2年12月3日	医療分野・フィールドワーク「高橋政代氏講義」ほか 講師：公益財団法人神戸医療産業都市推進機構クラスター推進センター 都市運営・広報課サイエンス・コミュニケーター 井上千浩氏 公益財団法人NEXT VISION 事務局長 山田千佳子氏 (株)ビジョンケア社長 高橋政代氏
令和2年12月8日	ロボット分野事前学習（2） 講師：(株)ダイヘン FA ロボット事業部企画部長 神品泰宏氏 人事部採用・教育課長 杉原健朗氏
令和2年12月11日	情報分野事前学習（2）
令和2年12月17日	ロボット分野・フィールドワーク「ダイヘン六甲事業所」 講師：(株)ダイヘン FA ロボット事業部企画部長 神品泰宏氏 常務執行役員 FA ロボット事業部長 金子健太郎氏
令和2年12月18日	情報分野・フィールドワーク「佐藤三久氏講義」等 講師：国立研究開発法人理化学研究所計算科学研究センター副センター 長 佐藤三久氏 公益財団法人神戸医療産業都市推進機構クラスター推進センター都市運 営・広報課課長代理 西田浩之氏 公益財団法人計算科学振興財団(FOCUS)普及促進グループ長 中谷景一氏 公益財団法人計算科学振興財団(FOCUS)普及促進グループ担当課長 高橋 太一氏
令和3年2月1日	KOBE 研修振り返り発表会

b 内容（分野ごとに紹介）

<事前指導（全分野共通）>

令和2年10月30日 全体への事前指導

9月30日より、普通科グローバルリサーチⅠ受講生（1年）と創造科学科5期生（1年）を対象に参加希望者を募り、医療分野に20名、情報分野に18名、ロボット分野に17名の計55名が参加することになった。10月30日、その生徒たちを対象に募集段階で記述させていた参加希望理由を各分野のメンバー全員で共有し、班づくりをした。また、KOBE研修の意義、当日までの活動、当日の動きについて全体説明をし、各分野でお世話になる団体からいただいた資料を配布した上で、その団体の取り組みについて調べ、聞きたいことをまとめるという課題を課した。課題の提出はGoogle Formsで行い、質問を取りまとめた。

<医療>

令和2年11月6日 医療分野事前学習（1）

神戸アイセンター病院において、普通科グローバルリサーチⅠ受講生（1年）3名が、KOBЕ研修（医療分野）の事前学習としてフィールドワークを行った。はじめに、同病院の栗本康夫院長に対して、事前に研修参加者全員から集めた質問を精査したものに答えていただいた。次に、ビジョンパークにおいて、ナビゲーターをされている和吉氏から同施設の説明や盲患者への支援や社会参加のあり方について、施設職員として、全盲患者としての両方の視点からお話していただいた。最後に、手術室などアイセンター病院の施設を見学させていただいた。今回は、感染症対策のため少人数のフィールドワークとなったが、参加した3名でこの活動をスライドにまとめ、医療分野を選択した残りの生徒と共有する予定である。



令和2年11月27日 医療分野事前学習（2）

本校第1 STEAM ROOMにおいて、普通科グローバルリサーチⅠ受講生（1年）13名と創造科学科5期生（1年）7名が、11月6日に実施した神戸アイセンター病院のフィールドワークについての共有を行った。フィールドワークに行った普通科生徒3名は3週間に渡ってスライドを作成し、ヒアリングの動画や3Dカメラで撮影した手術室の写真などを交えながら、神戸アイセンター病院でのiPS細胞を用いた最先端眼科治療について、ビジョンパークにおける盲患者支援のあり方について、視覚障がい者に対する対応について、自分たちなりの解釈も交えて説明した。



令和2年12月3日 医療分野フィールドワーク「高橋政代氏講義」ほか

キメックセンタービル10階会議室において、普通科グローバルリサーチⅠ受講生（1年）13名と創造科学科5期生（1年）7名を対象にKOBЕ研修医療分野を実施した。はじめに、展望室に移動して公益財団法人神戸医療産業都市推進機構クラスター推進センター都市運営・広報課の井上千浩サイエンス・コミュニケーターからポートアイランド2期の医療・バイオ・情報クラスターについて、神戸医療産業都市を構成する地元中小企業・海外企業や大学・研究機関、医療機関等との融合・連携が促進し、クラスターの形成が加速していることをお話しいただいた。次に、エア・ウォーターが運営する国際くらしの医療館・神戸に移動し、歯髄移植・再生治療や最先端の医療機器、8K映像・画像処理について学習し、産官学・医師・メーカーなどと連携した共同研究開発など、新たな事業を生み出す場として活動しているという説明を受けた。そして会場に戻り、公益財団法人NEXT VISIONの山田千佳子事務局長から事前学習のふりかえりをもとに講義をしていただいた。最後に株式会社ビジョンケアの高橋政代社長から「再生医療からAIロボットへ」というテーマで、再生医療の研究を始めた経緯から、現在取り組んでいる研究、未来について意識した行動が未来をつくることなど、たくさんの経験談を踏まえて講義していただいた。



<情報>

令和2年11月6日 情報分野事前学習（1）

事前指導での課題とは別に、公益財団法人計算科学振興財団（FOCUS）からいただいた事例集『スーパーコンピューターが支える・変える わたしたちの暮らし』をもとに、気になったスーパーコンピューターの使用事例を3つ選び、選んだ事例について、自身の考えや興味をもったこと、疑問に思ったことなど、Google Forms を利用して提出した。提出した感想は FOCUS に送付し、フィールドワーク当日に説明していただくことになった。

令和2年12月11日 情報分野事前学習（2）

スーパーコンピューター活用の可能性について考えるため、家庭生活、交通機関、教育機関、公共機関、企業活動、災害等の場面で、改善してほしい事柄について考えた。その上で、精度の向上や効率の向上がされることが望ましいと思われる事柄と、実現することで訪れる未来や社会、まだ実現されていない理由や現状の課題などについて意見を出し合い、Google Forms でとりまとめた。前回の事前学習同様に、感想は FOCUS に送付し、12月18日に助言いただくことになった。

令和2年12月18日 情報分野フィールドワーク「佐藤三久氏講義」等

キメックセンタービル10階会議室において、普通科グローバルリサーチⅠ受講生（1年）10名と創造科学科5期生（1年）7名を対象に KOBE 研修情報分野を実施した。はじめに、国立研究開発法人理化学研究所計算科学研究センター副センター長の佐藤三久氏から「スーパーコンピューター『富岳』～『京』から『富岳』へ～」というテーマで講義をしていただいた。次に、公益財団法人神戸医療産業都市推進機構クラスター推進センター都市運営・広報課課長代理の西田浩之氏からポートアイランド2期の医療・バイオ・情報クラスターについて、神戸医療産業都市を構成する地元中小企業・海外企業や大学・研究機関、医療機関等との融合・連携が促進し、クラスターの形成が加速していることをお話いただいた。

また、展望室にて各クラスターを確認した。続いて、公益財団法人計算科学振興財団（FOCUS）に移動し、同財団普及促進グループ長の中谷景一氏からシミュレーションクラスターと FOCUS について説明をしていただいた。同担当課長高橋太一氏から事前学習をもとに、スーパーコンピューターの活用事例やこれからの可能性について講義をしていただいた。最後に同施設の「スーパーコンピューター誕生と発展の歴史」と「世界一を獲得した日本のスーパーコンピューター」の展示をもとに、スーパーコンピューターの過去と未来について説明していただいた。



<ロボット>

令和2年11月9日 ロボット分野事前学習（1）

本校同窓会館武陽ゆ〜かり館において、普通科グローバルリサーチⅠ受講生（1年）7名と創造科学科5期生（1年）9名が、KOBE 研修（ロボット）の事前学習として、株式会社ダイヘンの人事部採用・教育課長の杉原健朗氏から同社の概要について説明を受けた。同社は変圧器メーカーとして創業し、現在、電力機器事業、半導体関連機器事業、溶接メカトロ事業の3つの事業を展開している。12月に見学予定の六甲工場はこのうち溶



接メカトロ事業である。同社の全体像と世界トップレベルの溶接技術とメカトロニクスについて概要を説明していただいた。

令和2年12月8日 ロボット分野事前学習（2）

本校同窓会館武陽ゆ〜かり館において、普通科グローバルリサーチⅠ受講生（1年）7名と創造科学科5期生（1年）9名が、KOBEL研修（ロボット）の事前学習として、「神戸の未来、ロボットと創る新しい社会」というテーマで班に分かれて発表を行った株式会社ダイヘンの。FAロボット事業部企画部長の神品泰宏氏と人事部採用・教育課長の杉原健朗氏にオンラインで参加していただき、コメントをしていただいた。

〈生徒発表タイトル〉

A班「給食室へのロボットの導入」

B班「災害救助ロボットの開発」

C班「コンビニロボット〜多言語対応ロボットで新しい社会へ〜」

D班「医療におけるロボット導入」



令和2年12月17日 ロボット分野フィールドワーク「ダイヘン六甲事業所」

株式会社ダイヘン六甲事業所において、普通科グローバルリサーチⅠ受講生（1年）6名と創造科学科5期生（1年）10名を対象にKOBEL研修ロボット分野を実施した。（株）ダイヘン六甲事業所では、溶接メカトロ事業と半導体関連機器事業を展開しており、ロボットの生産体制の自動化を進めている。はじめに、事前学習で生徒発表への講評もいただいたFAロボット事業部企画部長の神品泰宏氏より「ロボットの過去、現在、そして未来」というテーマで、ダイヘン株式会社の変遷からどのようなロボットを作るようになったのか、これからの社会に求められるロボットや技術はどのようなものかなど、専門的な内容も生徒たちに分かるようにかみ砕いて講義をしていただいた。その後、実際に使用されているロボットをプログラミングで動かす体験学習をさせてもらった。また、ロボットがロボットを作る様子、ロボットが共同して一つのものを作る様子のほかに、そのような製品を作るためにパソコンの前でプログラミングを組んで、実際に動くか実験している様子など、エンジニアとの交流を行いながら、工場全体を見学させてもらい、最後に質疑応答を行った。



<全体として>

令和3年2月1日 振り返り発表会

本校同窓会館武陽ゆ〜かり館と第1 STEAM ROOMの2会場において、医療分野20名、情報分野17名、ロボット分野16名、フィールドワーク欠席者2名の計55名を対象に、フィールドワークの振り返り発表会を実施した。各分野4〜5班に分かれて作成したスライドをもとに、各会場にて研修で学んだことを発表した。発表後には質疑応答を行い、発表者たちはメモを見たり、内容を思い出ししながら、答えられる範囲の質問に回答し、全体での学びを深めた。



成果物 生徒作成スライド <医療（事前学習②にて）>（一部抜粋）

神戸アイセンター病院

1. iPS細胞の臨床研究
2. アイセンターQ&A
3. ビジョンパークについて
4. ビジョンパークQ&A

iPS細胞の臨床研究

iPS細胞を使用した目の治療

世界初！

移植されたiPS細胞が、**開発された当初から**、

細胞ある意味、**絶対に「公算しない」**
重慶の患者（失明）の
信頼関係が築かれている。

アイセンター Q&A

Q1.iPS細胞を活用してどのような病気が治るのか。

A.すべての病類！

iPS細胞でなんでも再生

Q3.患者さんの社会復帰まですべてアイセンターがサポートするのはなぜ？

A.社会支援→病院単独、難しい
支援団体 行かない患者

アイセンター
ポイント①イメージが**明るい**
②病院入り口にビジョンパーク設置

Q4.基本概念に高度な最先端医療を取り入れ、地域社会や医療機関につながるがあるが、どのようにつながると考えているか。

A.最先端医療・標準医療
高度な治療を社会に還元

Q8.今アイセンターでは主にどんな研究をしているのか。

A.①網膜のiPS細胞の研究
②遺伝子治療

現実になりつつある！

VISIONPARKって？

公益財団法人NEEDVISIONが運営している。

視力の低下による困難を抱える人々が、生きる希望を取り戻すための気づきを提供し、病者と患者を促すことを目的とした支援空間

またその設置取りも重要で

わが「入出口のすぐ近く」に設置されている！

① 入出口のすぐ近く
② 視覚障害者
③ 聴覚障害者
④ 身体障害者
⑤ 知的障害者
⑥ 発達障害者
⑦ その他

何故入出口の近くに施設を設置したかというところ。

① 神戸アイセンター病院など併設されている施設を目的としてこれらの方に**視覚障がいを持っている方々の元気づけ**を見せることで、偏見を減らすため。

② 病院で視覚に異常があると診断された方が建物を一人で抱え込まずに「少し相談してみようかな」と思ってくれるようにするため。

支援施設と眼科病院が離れている場合

医師「では、支援施設を紹介するので、そちらへご来訪ください」

しかし、実際には行くのが怖くてほとんどの患者さんが支援施設などに付かず引越こもりになるというケースが多いという

診断を受けて、支援施設に移動するという大きな障害なしに相談でき、且つ同じ病状の方や、もっと重症を患っている方とも交流できる！！

ああ、人生終わった—— → **自分たちにも病状があるんだ**
この人たちに支えられながら生きていけるんだ

生活への活力になる！

それが支援施設が病院と併設されている強み！

Q1 視覚障がいの方が生きやすい社会をつくること治療をして健康者として生きていく社会をつくることどちらが大切か

A1 障がい者を社会の外にあるという意識がある＝問題
みんな障がい者・みんな健康者
障がいという見方をなくしていく

Q2 白杖を持った人に何をすれば助けになるか？

A1 困っていたら声をかける
OK・信号機で。
「青にかわりました」
・介助するとき⇒ひし、肩をもつ
挨拶・コミュニケーション **大切**

Q4.バリアを設置することの効果

M4・段差は白杖があれば**バリアではない**
＝段差があるかないか**知らない**ことがバリア
・見える人に**伝え、広めてもらう**

Q5 アイセンターと連携する利点

A5 一般的な病院 病院⇒リハビリ施設
ビジョンパーク⇒病院と一体
＝リハビリ施設行きやすい
意識を変えるため

<KOBE 研修振り返り発表会>（一部抜粋）

兵庫県立北神戸高等学校
KOBE研修（医療分野）
医療の未来を考える
久西 礼典 山本 悟士 桂谷 菜穂 徳中 百恵

～網膜再生治療～ 高橋政代先生

眼科医として働くこと
アメリカで網膜再生治療について学ぶこと
やらなことに決まっている

一眼科医であらうが、網膜再生治療というものを課題としてやっているのは私だけ！？
一私がつらくない！

挑戦する(hill's eye)

境界領域
アメリカで網膜再生治療について学ぶこと
やらなことに決まっている

ゼロベースから何かを生み出す

「一つやっても、ある一定の結果がでたとしてもそれはまだスタート。」
アメリカでの出来事から20数年。
たくさん時間がかけてやっとたりきく

2017年 2月28日
後援：神戸市、神戸市立医療センター、神戸市立医療センター
第一度目の研修手帳を渡す。

目標 高橋と山本
こんな感じ
こんな感じ

国際くらしの医療館

「人々の豊かな『くらし』を創造する。研究・開発拠点。至コンセプトに、医療にかかわる次世代事業を展開しています。」

医療関連サービス事業
B K 医療事業
開発センター
最先端医療事業

歯髄再生治療

歯髄とは・・・
血管や痛みを感じる神経が含まれる。
また、それらを再生させる幹細胞も歯髄の中に存在する。

歯髄再生治療
不安な歯（乳歯や親知らず）の歯髄から幹細胞を抜き出し、歯髄の治療などで歯髄を回復してしまつた歯に移植し再生する技術。

この幹細胞は、神経や筋肉、臓器などの病気の治療への活用を期待されています。

医療ロボット

最先端治療には「熟練者」が不可欠
しかし人間だと上手く扱えないことが多い

それを叶えてくれるのがAである

そこで汎用ヒト型ロボットLabDroid-まほろについて簡単に紹介します！

再生医療・医療ロボットの開発・**新型コロナウイルスの検査は大**
 =今までよりも人同士の接触を避けることが重視され、
 ロボットの必要性が高まる。
 ロボットを使えば、介護、リハビリ、受付、検査、縫刺、
 画面を選べば、診察もすべて**無人**で出来る！
 ⇒ロボットと医療はこれから、さらに密接に関わり、
 共に発展していく。

池田雪美 岡本和佳 富山碧衣 藤井宏一郎

？KBICとは

Kobe Biomedical innovation Cluster(神戸医療産業都市)

1998年に阪神・淡路大震災で傷ついた人と街を元気にするために始まった。

目的
▽超高齢社会での治療、生活の質の向上

メディカルクラスター
 近畿道門部医療機関が集積・連携。
 バイオクラスター
 西生産業の活用と中部近畿北に広がる先端医療に
 取り組んでいる。
 シュミレーションクラスター
 世界最先端のシュミレーション技術を開発する。

世界初！IPS細胞を用いた移植手術
 CAR-T細胞療法
 産産連携

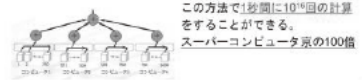
リサーチ・イノベーション・センター
<http://www.research-ic.jp/>

- ・シミュレーション技術の普及による産業活性化
- ・普及、啓発活動
- ・人材開発、研究活動



・スーパーコンピュータの計算

スーパーコンピュータはたくさんのコンピュータを同時に使う並列計算という方法で計算をしている。例えば、計算するのに1000秒かかることも4つのコンピュータを使えば250秒でそれぞれの計算が完了する。



左の図のようにメッシュと言われる
赤色の縦線と横線で区切り、計算し、それ
を組み合わせることによって
単純な矢印から複雑な風向きを予想する
ことができる。

気象庁も観測課気象会場のホームページより
http://www.jma.go.jp/gou/gou_koku/koku/koku_hourei2_winter.jpg

・スパコンは万能ではない
スーパーコンピュータのシミュレーションは天気予報の他にも
ウイルスや地震などの病原菌関係、津波や地震などの災害、CO2
を用いた温暖化といった様々なことに使われている。
しかし、条件の設定に手間がかかることやスパコンを動かすため
の電力の限界、使われている半導体技術の限界などの課題もある。

④DAIHEN六甲事業所
～ロボットがロボットをつくる工場～

小森、芝田、張、三木

少子高齢化
↓
医療需要拡大
医療従事者の不足
↓
ロボットにおける医療が必要

- 事前学習>
- DAIHACHI事業概説説明
- 顔て学習「神戸の未来、ロボットと創る新しい未来」
- <研修当日>
- 講義
- ロボット操作の体験
- ロボット技術を使った作業を知
- ロボットを使った生産現場を見
- 簡潔説明を見る
- 質疑応答

使ってみた感想：慣れは必要だけど、時間はかからず、初心者でも、比較的扱いやすい。特徴：直感的な操作で、ロボットの動作に備わっていない方法でも操作が容易。

↓

利点と活用方法：ロボットを専門に扱い扱っていない人でもなくてはならない、ロボット化のハードルを下げ、ロボットがあまり導入されていない分野での導入を促進する。

思ったこと

重たいものを運ぶ人数を大幅に減らすことで、ほかの事業の人手を確保できる。また、重たいものを運ぶ人数を減らすことで、時間短縮できると思った。

「360°移動可能な仕組み」

右側のようにタイガリが1つあれば、簡単に水平回転して重たいものを自由に平行移動。全く動かさずに移動可能で、スムーズに移動が可能。

▲右から見たAraTranの姿

- ・360°スイングによる360度移動可能
- ・700kgまでの重量物を運送可能
- ・ワイヤレス充電対応
- ・タブレットによるルート設定可能

プログラミングをして学んだこと

プログラミングに対して
難しくてややこしい
イメージがあった

実際に自分でやってみると
予想よりも操作しやすく、
簡単なイメージに変わった

今日、私たちが用いたもの

▲サイーチペンダント

プログラミング
簡単な作業
人間
複雑な作業
効率的に生産

プログラミング
簡単な作業
人間
複雑な作業
効率的に生産

ライトカーテン

安全柵

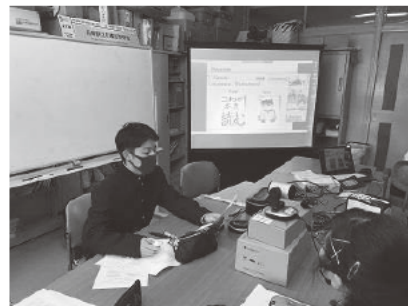
センサ

人がロボット稼働範囲に侵入
→ ロボットの動作停止
→ 人の接触トラブルが防げる

安全柵は人とロボットの分離を感じた
①「協働ロボット」の導入で安全柵の壁面→分離感低減、場所の有効活用

③ Glocal High School Meetings 2021 令和3年1月30日

創造科学科4期生(2年)1名と5期生(1年)4名が、文部科学省指定グローバル型地域協働推進校探究成果発表委員会主催「Glocal High School Meetings 2021」にて、4期生は日本語部門、5期生は英語部門にそれぞれ発表動画を投稿した。この発表会は、地域との協働による高等学校教育改革推進事業(グローバル型)の指定校・事業特例校・アソシエイト校(対象37校)がオープン参加で動画投稿し、立教大学グローバル教育センター長の松本茂教授を中心に審査を受けた。本校は、英語部門が金賞(探究成果発表委員会特別賞)、日本語部門が銀賞を受賞し、5期生生徒が発表会にて英語部門の成果発表を行った。



<発表タイトル>

- ・英語部門 “Cool Japan”, “Card Game”, “Communication” ～Languages Learning for Vietnamese～ 金賞(探究成果発表委員会特別賞)受賞
- ・日本語部門「女性議員を5割に増やすための政策提言～神戸市議会議員へのアンケート調査をもとに～」 銀賞受賞

<生徒の感想>

私は初めてオンラインでの発表会に参加しました。準備の段階で、対面とは少し勝手が違うため、「どうすれば伝わりやすいのか」ということを改めて考えるきっかけにもなりました。また他校の発表を聞くときも、自分の興味のあるものを何度でも、何回でも見られるという今までにはない形式だったので、自分自身も非常に多くのことを吸収することができました。今日の学びを今後の発表にも生かしていきたいと思います。

自分たち以外のグループの研究、発表をたくさん見てみて、自分たちがやっている研究の良いところと悪いところがだんだん見えてきたように思います。今回は映像視聴ということもあって、研究内容に加えて英語の発音なども気にしなければいけなかったのが個人的にはとても大変でした。本番はぐだぐだで申し訳ない気持ちでいっぱいですが、これから改善できるように努めたいと思いました。他校の発表については、ほとんどふたば未来の発表しか覚えてないくらいあの活動内容の中身に驚きました。何より活動に対する熱意が伝わってきて、自分たちもさらに全力で取り組まないといけないんだなと刺激を受けました。

Language Learning by 3 C!!

"Cool Japan , Cardgame , Communication"

Yuki Imanaka Ayaha Abe Risa Takehara Yushin Cho

Hyogo Prefectural Hyogo Senior High School

Outline

- ① The current status of foreign residents
- ② Activity flow & our purpose
- ③ Our Proposal
- ④ Future prospects

Changes in the number of foreign residents

TRANSITION OF THE NUMBER OF FOREIGN RESIDENTS

The number of Vietnamese people are rapidly increasing!

The current status of immigrants in Japan

The number of foreign residents in Kobe is 50,155, of which Nagata Ward accounts for 7143.

The percentage of foreign residents in Kobe

Ratio of foreign residents by nationality

Current situation
Vietnamese people account for the 2nd largest percentage, but there aren't many signs in Vietnamese in Nagata.

2015.9.30
From Basic Resident Registration

① Activity Flow & Policy

Cause Many Vietnamese live in Nagata.

Question Field Work in Nagata Ward Office
"Do you have problems in your life?"

Purpose
Find out their problems and support them.

① Problem

It can be difficult to have a conversation between Vietnamese parents and their children.

Field Work

- Futaba Local Welfare Center
- Study Vietnamese and Japanese every Sunday
- A wide range of generations and professions attend

Languages Class

Engineers, Technical intern
↓
Using textbooks
Conversation

Vietnamese parents and children
↓
Using textbooks
Playing games

② Our proposal

Let's play and learn with parents and children in a card game!

Previous Activities

- Karuta is used for language learning
- "Karuta 2020"

However...

If it's just *Karuta*, you'll get bored, won't you?

Playstyle

1. Karuta (Japanese, Vietnamese) → Conversation

Read Take

Playstyle

2. Translation Game → Translation

Playstyle

3. Make Words → Word

Playstyle

4. Make Passage → Grammar

② Our Proposal

Contents of the Workshop

Where : Futaba local welfare center
Target : Vietnamese parents and children

Make the cards
↓
Bring the cards there
↓
Use it in language class

② Our Proposal

Cool Point I

Many playstyles

- ▶ We can learn grammar, words, etc.
- ▶ We can create new games.

② Our Proposal

Cool Point II

Manga and anime characters



Interesting for children



Easy to start learning !



Feasibility

Q. Can Vietnamese people understand Japanese?

A. Support from teachers in the class



Q. Is it safe considering Corona virus?

A. Take measures considering people's safety

③ Future Prospects

Play and study in the languages class together.

➡ Continue to use them

➡ Place the cards at the facility for lending

Parents and children can learn and teach each other !!

Spread to the world

To learn languages



To understand the systems and customs of other country



To improve our quality of life!



Reference

・ 渋谷セカリエ かるたで広がるワクワク世界 (9/2)
<https://resident.jp/retaienda/wakuwaku/sekaiya/announcements/121098>

・ かるた2020 (9/3)
<https://karuta2020.tokyo/>

・ 国語・地域別在留外国人数の変化 (12/20)
<http://www.moj.go.jp/content/001289226.pdf>

Thank you
for
listening !

④ WKC フォーラム第 8 回高校生「国際問題を考える日」

目 的	(1)高校生のグローバルな社会課題やビジネス課題への関心を高め、コミュニケーション能力や課題発見能力、問題解決能力の向上を図る。 (2)高校生のグローバルな社会課題やビジネス課題に関する研究や実践の拡大、充実、活性化を図る。 (3)開発教育や課題研究に取り組む高校と大学、国際機関との交流を促進し、ネットワークの形成を図り、教育内容の充実を図る。 (4)地球市民としての生き方やあり方を考える。
内 容 I. オンラインイベント	〔主催〕 兵庫県教育委員会、大阪大学、WHO 神戸センター (WKC) 〔日時〕 令和 3 年 2 月 11 日 (木・祝) 13:00~15:00 〔場所〕 兵庫県内参加校各学校 (オンライン) 〔対象〕 兵庫県内の大阪大学連携校、「ひょうごスーパーハイスクール」指定校生徒 (課題研究成果 LIVE 発表 (以下、LIVE 発表) 申込は各校 1 件まで) 〔方法〕 オンライン開催 (1 校につき、1 アカウント) 課題研究成果発表やパネルディスカッションについて、ライブ及びチャット等で質問や意見交換をする。
II. 動画投稿と視聴	〔対象〕 動画投稿：兵庫県内の大阪大学連携校、「ひょうごスーパーハイスクール」指定校生徒 (投稿数制限なし) 動画視聴：全県希望校生徒 〔方法〕 (1) 課題研究発表動画 (プレゼンテーションソフトで作成した資料をモニター・スクリーン等に投影し、説明する様子を撮影した 8 分以内の動画) を指定サイトにアップロードする。 (2) 全県立高校の希望校に配布される ID を利用して、公開期間にオンデマンドで視聴し、コメントを入力する。
担当教員	英語科教員 (1 名)、社会科教員 (1 名)、実習助手 (1 名)
対象生徒	グローバルリサーチ I・II 受講者の希望者 10 名、創造科学科第 2 学年文系 7 名、第 1 学年 5 名 計 22 名
評価方法	ふりかえりアンケートの回答内容による。

a 経緯

期 日	内 容
令和 2 年 11 月初旬	対象生徒に要項、参加申込書配付。
令和 2 年 11 月 13 日 (金)	LIVE 発表、動画投稿、参加希望生徒数申込。
令和 2 年 11 月 26 日 (月)	LIVE 発表希望生徒 4 名より、11 月 18 日 (水) に実施した創造応用 II 中間発表会の外部講師及び本校教員の評価を参考資料として審査し、1 名を選考。
令和 2 年 12 月 11 日 (金)	LIVE 発表内容 (研究の背景、目的、方法、結果、考察について A4 2 枚以内) 提出。
令和 2 年 12 月 25 日 (金)	動画投稿発表内容(200 字~400 字)4 件提出。
令和 3 年 1 月 8 日 (金)	審査の結果、LIVE 発表応募 9 件中 4 件に本校生徒発表が選出される。
令和 3 年 1 月 29 日 (金)	動画撮影、指定サイトへ投稿。
令和 3 年 2 月 11 日 (木・祝)	オンラインイベント (当日プログラムは b-1 参照)・ふりかえりアンケート実施 (GoogleForms を利用)。
令和 3 年 2 月 11 日 (木・祝) ~2 月 26 日 (金)	動画視聴及びコメント入力。

b 内容

b-1 当日プログラム

13:00	開会挨拶
13:05	課題研究成果 LIVE 発表（15 分×4 チーム：県立兵庫、長田、加古川東、姫路西高等学校）
14:05	休憩
14:10	対談 「地域にある国際関係機関を知ろう～JICA 関西と WHO 神戸センターにとっての 2020 年～」 永田禎章氏（独立行政法人国際協力機構（JICA）関西センター業務第一課/国際防災研修センター 副調査役）・ローゼンバーク恵美氏（WHO 健康開発総合研究センター（WHO 神戸センター）テクニカル・オフィサー） ※国際関係機関で働くことについて、自身の動機や経験、新型コロナ感染症対策に関する現在の業務内容についての講演と参加生徒による質疑。
14:40	生徒評価結果発表・大学教員による講評及びミニ講義
14:55	閉会挨拶
15:00	閉会



写真1 「LIVE 発表」の様子

※本校生徒発表は生徒投票 1 位（姫路西高と同点）に選出された。



写真2 「対談」視聴の様子

b-2 動画視聴

14 校 53 件の動画が投稿された。本校は、総合科学科第 2 学年（74 期生）4 名（うち 1 名 LIVE 発表参加生徒）が創造応用 I L における課題研究の発表動画を投稿した。表 1 に、発表タイトルと概要を記載する。

表 1 本校投稿動画（4 件）の発表タイトルとその概要

1 学校教員の長時間労働改善に向けて、削減・効率化すべき業務内容の検討 —教員・生徒双方の学校教育に対する意識に着目して— ※LIVE 発表参加
本研究では教師の長時間労働について兵庫県内の高等学校の教員と生徒を対象にアンケートを行って教員が負担と感じている業務及び生徒が学校に求めている役割とその重要度について調査し、できる限り生徒への悪影響が少ないなかで削減・効率化が可能である業務を明らかにすることを試み、解決策について提案する。
2 公教育での宗教の学び方について
本研究の目的は、宗教理解も含んだ異文化理解を持つことの意義を提言し、宗教の変遷や教義の内容を学ぶだけでなく、日常に生きる宗教の姿を実感を持って学ぶことができる教育の形を提案することである。具体的には神戸市のモスクでのフィールドワークを基に高校生を対象とした異文化理解教材の開発を試みる。
3 騒音と捉えられない音響装置付信号機の提案
本研究では、視覚障がい者の横断中の安全を確保することを目標とし、①スマートフォンなどを利用し、信号機に近づいたら青かどうかを知らせてくれるシステムを作る方法、②騒音と捉えられにくい音色、メロディを考え、実際に作ってみる方法を提案する。

4 選挙への関心を高めるメディアの在り方について

日本の選挙における若者の投票率は年々減少しており、若者の政治への無関心が問題視されている。この意識を変えるために有効だと考えたものが近年増えている「選挙用のメディア」である。本研究では、いくつかの選挙メディアを Web ページ評価の観点から分析し、より伝わりやすく、投票行動を促進するメディアの在り方について提案する。

c 成果と課題

参加者 22 名に対し、ふりかえりアンケートを実施した。質問項目は、「フォーラムへの積極的参加」、「国際問題に対する理解の深まり」、「今後の活動への有益性」に関する 3 つの質問について「4: そう思う」、「3: ややそう思う」、「2: ややそう思わない」、「1: そう思わない」の 4 段階で評価させ、1 年生、2 年生、全体の割合を算出した。

また、LIVE 発表と JICA 関西と WHO 職員による対談の感想を自由に記述させた。

図 1～3 は各回答の割合 (%) である。

いずれの質問項目においても、全体的に肯定的な回答の割合が高く、特に、1 年生のほとんどが「本プログラムが今後の研究に役立つ」と回答した。

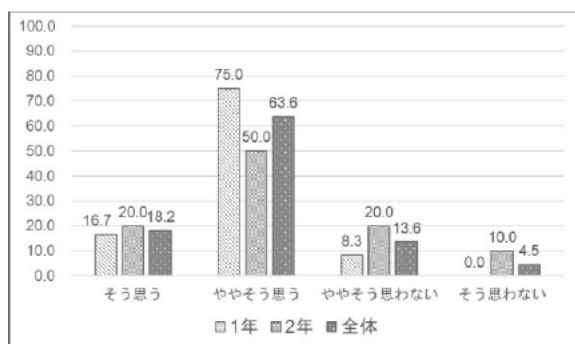


図 1 Q1-1 フォーラムには積極的に参加した (N=22)

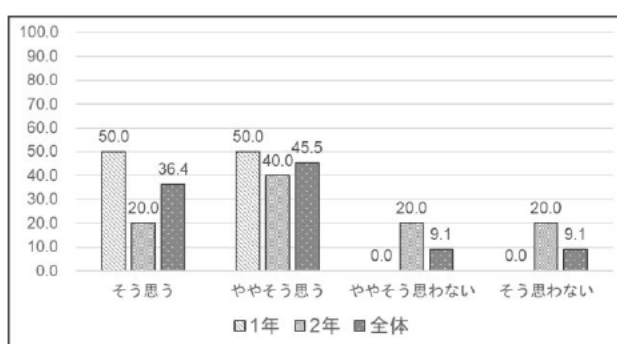


図 2 Q1-2 国際問題に対する理解が深まった (N=22)

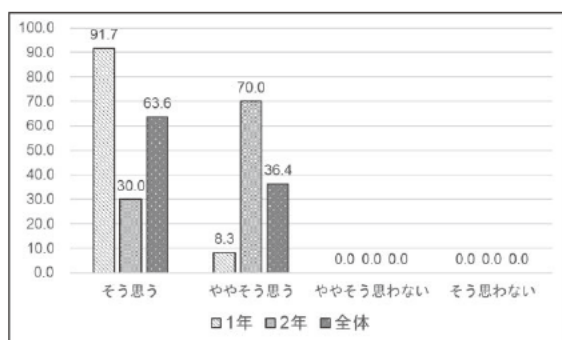


図 3 Q1-3 フォーラムはこれからの学習に役立つと思う (N=22)

表 2 は、LIVE 発表と対談の生徒の感想の一部である。

やはり、LIVE 発表や大阪大学の先生方による講評や今後の研究に対するアドバイスは、これから本格的に研究を始め、自分の将来の進路について考えていく 1 年生にとって有益であったようである。今回の参加者は、文系生徒であったが、アンケートや評定実験を行った結果に基づいて考察が述べられていたこと、講

評を聞く中で「クロス集計」「 t 検定」「分散分析」「代表値」「順序効果」等、普段聞きなれない専門的な統計用語を耳にして、文系テーマで

あっても科学的論拠に基づく研究を行うことの重要性に気づかされた生徒が多かった。

2 年生は、昨年度神戸ファッションマートで開催された参加者 600 名を超えるポスター発表と講演会の第 7 回のフォーラムを見学しており、また自身の研究の調査に関してもほぼ終了しているため、1 年生に比べるとやや参加意識は低かった。しかしながら、1 年生同様、LIVE 発表と講評の内容は、最終論文作成や大学における研究を進めるにあたって参考になったと思われる。また、4 月の休校期間中から 6 月の分散登校中にかけて行った新型コロナ対策について様々な立場から提言を行う文理融合型のプロジェクト学習を経験していることから、JICA 関西と WHO 神戸センターの取組についての対談も興味深く視聴できたようである。

表2 LIVE 発表と対談を視聴した参加生徒の感想（一部抜粋）

Q2 LIVE 発表を視聴した感想を自由に書いてください。 〔1 年生〕 ・今回ライブ発表を視聴して、私にはあんなに良い発表をできるのかということが一番に考えた。自らテーマを決め、実際に実験を行い、そこから対策を導き出すということを、2 年生になると自分がしなければいけないと考えると、パワポの作り方など勉強になった。 ・テーマ設定や調査方法、実験のやり方から発表の構成までとても参考になった。 ・4 つの発表を視聴して感じたことは、社会科学という視点であるのに、具体的な数値やグラフを示していらっしゃって大変わかりやすく根拠に基づいていた意見であることがすぐ理解できた。 〔2 年生〕 ・大学教授からの講評であった「根拠を集める」「効果が本当にあるのか検討する」「調査設計が妥当か考える」といったポイントは、これからの論文作成、大学で行う卒論にも非常に役立つものになったと思う。 ・全体を通して、質疑応答の時間では、条件を揃えることや、分析の手法について大学の先生が掘り下げてアドバイスされていて、勉強になった。 ・パワポの見やすさで、研究を開きたいと思うかどうかが大きく変わることを改めて実感した。 Q3 対談「地域にある国際関係機関を知ろう～JICA 関西と WHO 神戸センターと振り返る 2020 年～」を視聴した感想を自由に書いてください。 〔1 年生〕 ・私は将来海外で仕事をしたり関わりたかったので、対談された方の経歴などとても参考になった。そしてより海外に行きたいという気持ちも高まり自分の進路も考え直すよいきっかけにもなった。 ・JICA や WHO の方々からお話を聞くことができる機会はそうそうないと思うので、大変貴重な経験になった。コロナウイルスの影響は計り知れず、甚大な被害が今もお広がっていることと思うが、その中でも正しい情報を正確に伝えることも含め活動をしてくださっていることを知った。今の情勢になる前から色々な問題はあったはずだが、その問題と同時並行で国際間を通してコロナ対策をしてくださっていることに今一度感謝したいと思った。 〔2 年生〕 ・私の視野が未だに狭いということを改めて感じた。より一層、自分の視野を広げること、それがたとえ自分が探究する分野でなくても興味を持ち、好奇心旺盛に知識の幅を広げていくこと、これからはそういったことを大事にしていきたい。 ・コロナウイルスが国際社会にもたらした影響についてお話をうかがうことができた。なかでも印象に残っているのは、「コロナが収束したとしてもコロナ前の社会に完全に戻ることはない」「オンライン主流の流れは変わらない」といった点だ。またその影響や SNS の台頭により、同じ考え方・価値観の人が小さな集合として集まりやすくなる、他の考え方に気付く機会が少なくなる、といった今後の社会の特徴も知ることができた。 ・オンライン化の流れがこれからも進行するのは確かだが、対面での良さというのも、なくしてはいけないものだと感じた。コロナが収束した後は、大学選びの基準に「対面授業かオンライン授業か」といった項目が加わったりもするのかな、と感じた。そして個人的には対面の良さも失ってはいけないと思った。

今年度は、前述のとおり、オンライン開催のため各学校 1 アカウントのみで、コロナ感染予防対策により参加収容人数の制限もあり、創造科学科とグローバルリサーチ受講生に参加を限定した。次年度は、普通科生徒にも参加機会を拡げ、今年度より実施している普通科の「総合的な探究の時間（ひょうたん）」の研究成果を発表できるようにしたい。また、創造科学科、グローバルリサーチ受講生の研究については、本校 STEAM 教育プログラムにおいて、データサイエンススキルの習得に注力し、科学的根拠に基づく、より質の高い研究を目指したい。コロナ感染症が 1 日も早く収束し、昨年度までのような全国の高校生と研究成果を共有し、交流も深まる対面のプログラムが開催されることを期待したい。

(3) 校外における実践活動等

a 経緯

期 日	内 容	対象者
令和2年6月20日	実践研究福井ラウンドテーブル2020 Virtual Summer Sessions	創造科学科1年生
令和2年8月4日	第17回多文化教師のための国際理解教育・開発教育セミナー	普通科GR 2年生
令和2年8月11日	SDGs Ideathon 2020	普通科2年生 創造科学科1年生
令和2年11月14日 15日	第14回全日本高校生模擬国連大会	創造科学科2年生 創造科学科1年生
令和2年11月21日	尼崎ラウンドテーブル	創造科学科1年生
令和2年11月22日	第10.1回長田区高校生鉄人化まつり	創造科学科2年生
令和2年12月3日	高校生ボランティア・アワード2020 WEB大会	創造科学科2年生
令和2年12月20日	ワン・ワールド・フェスティバル for Youth 2020	普通科GR 2年生 普通科GR 1年生 創造科学科2年生 創造科学科1年生

b 内容

令和2年6月20日 実践研究福井ラウンドテーブル2020 Virtual Summer Sessions

創造科学科5期生（1年）の9名が、福井大学連合教職大学院主催「実践研究福井ラウンドテーブル2020 Virtual Summer Sessions」にオンラインで参加した。テーマは「学びと教えのニューノーマルを協働探究する：真の『学び舎』としての学校を目指して」である。生徒はオンラインポスターセッションで自分が望むこれからの学び発表を行い、テーマに関するワークショップに参加した。

<生徒の感想>

これからの学びについての自分の意見に、同世代の高校生だけでなく教員の方も共感してくれ、とても嬉しかった。また、自分が質問する、される両方の立場に立ったことでより視野が広がり、自身の考えを深めることにつながった。このポスターセッションを行ったことで、これから解決すべき教育の課題がより明確になったと思う。

私の班は主に教師と生徒という立場から討論を行いました。教師の方が多くおっしゃっていた意見として、生徒の本音が分からないというものがありました。生徒側の意見としてはなかなか先生に本音を伝えられないというものが上がりました。特にこの時期新しい授業の方針や課題の提出などがあり試行錯誤が必要だそうです。だからこそ私たち生徒側が積極的に本音を伝えることでより良いもののできるのではないかと思います。

ここでは、ニューノーマルということは新しいものを作り出すのではなく、今まであったものをもう一度考え直すということだということを学んだ。私たちはこのパンデミックで、新しい教育制度を作らなければいけないと思っていたけど、日本の昔の教育制度や方法を見直してみると、意外に答えが見つかるかもしれないと思った。過去を振り返るということも大切だなと思った。

令和2年8月4日 第17回多文化教師のための国際理解教育・開発教育セミナー

オンラインにて、普通科グローバルリサーチⅡ受講生（2年）の生徒1名が、兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会、JICA 関西、神戸 YMCA、PHD 協会、難民事業本部共催 「第17回多文化共生

のための国際理解教育・開発教育セミナー」の1日目の基調講演に参加した。NPO 法人開発教育協会 (DEAR) の中村絵乃事務局長に「COVID-19 と開発教育」というテーマで講演を聞いた。講演後、参加者同士で小グループで話し合い、多様な視点で新型コロナの問題について考えた。

<生徒の感想>

基調講演では、コロナウイルスと開発教育をテーマに、コロナウイルスの影響から気づいたこと、考えたことについてグループに分かれて話し合いました。対象者が学校関係者、学生であったため、参加者はほとんど全国の学校の先生で、各学校の裏事情が分かって面白かったです。私がコロナウイルスの影響について気づいたことは、毎日、ニュースなどを見ていると、政府の人や県や市のトップの人の言うことが二転三転しており、上に立つ人はあまり現場のことはわかっていないのかなということです。私も将来人の上に立つ仕事に就くかもしれませんが、今のうちから出来るだけ色々な現場を見ておきたいものだと思います。また、考えたことは、今まで私はグローバルリサーチの授業などを通して難民の方など困っている人をどのように助けられるのかなど考えてきましたが、いざ自分がコロナウイルスの感染拡大による学校の全国一斉休校など、困っている側（難民の方とは程度の差がありますが）に回った時、自分よりもっと困っている人について考える余裕が無くなっていたということです。同じグループの人からは、学校の対応の仕方として、人それぞれ（コロナウイルスの感染防止対策には）いろいろな考え方があるから学校側がいろんな選択肢を用意するべきだと思うという意見や、学校に入ってくる情報がバラバラで、どれを信じたら良いのかわからないという意見がありました。上からの指示を待つだけでなく、自分達で考えることが大切だと言っている人もおり、私も、公務員はいろいろなしがらみがあって大変だと思うけど、自分で考える姿勢を失ってはいけないと思いました。

令和2年8月11日 SDGs Ideathon 2020

オンラインにて、普通科2年生1名と創造科学科5期生（1年）1名が、関西学院大関西学、特定非営利活動法人国際社会貢献センター（ABIC）主催「SDGs Ideathon2020」に参加した。2020年度スローガン『One day or Day one ～「いつか」か「今日」か～』のもと、大阪・兵庫の高校生約30名が集い、SDG3の「Good Health and Well-Being」についてディスカッションを行った。高校生のほかに、大学生や留学生も加わって議論し、グループごとに発表をした。本校創造科学科生徒を含む班は審査の結果、第1位となった。

<生徒の感想>

「やっぱり、英語で話すのって楽しい!!」普段は見えにくい、英語の魅力を改めて感じる事ができた。まず挙げられるのは、英語を使うことで世界中の人と交流できたことだ。日本の高校生はもちろん、ザンビアやイギリスの高校生とも意見を交わすことができとても刺激的な体験をすることができた。二つ目は、英語で意見を交わすことで日本にいただけではあまり触れられない多様な考え方に触れられたことだ。”make sense”（筋が通っている）という言葉が表すように、海外の高校生はとても論理的な考え方をされていて、率直にすごいなと思った。多様な考え方に触れ、なおかつ英語力も向上させられたため、今回のイベントは一石が二鳥にも三鳥にもなる有意義なものだった。

令和2年11月14日15日 第14回全日本高校生模擬国連大会

今年はオンラインで第14回全日本高校生模擬国連大会が開催され、本校創造科学科4期生（2年）1名と5期生（1年）1名が参加した。本大会は、全国各地から集まった高校生が各校2人1組となり、実際の国連での会議をイメージしながら、各国の大使として熱い議論を交わすというもので、本校は4年連続の出場となった。会議において生徒はタイ大使を務めた。今回の会議は第75会期国際連合総特別政治問題・非植民地化委員会（第四委員会）の「宇宙利用“Uses of outer space”」を議題とし、①すべての国の利益のための宇宙利用、②持続可能な開発と宇宙という2つの論点についての話し合いが行われた。議場では、似た考えを持つ国同士で集まり、各グループ毎に成果文書を残すべ

く活発な交渉が交わされた。本校生はスピートをこなし、積極的に色々なグループと意見交換をし、決議に自分達が考えた文言を残すという成果もあげた。

<生徒の感想>

今回は本番である模擬国連全日本大会に出場した。今年はコロナの影響で東京での開催は無く、自宅からのオンライン参加であった。全日は灘会議の時よりも経験を積んできた人が多く、また違った雰囲気であったように思う。一日目は話し合いについていくのに必死で、思ったように発言できなかったが、二日目では他の大使の協力もあり自国のスタンスを主張することができた。最終的には時間の関係上 DR 提出が少し遅れ、受理されずに終わってしまったものの、自分達が参加したグループの中では上手くコンバインできていたので、その点においては良かったと思う。灘会議も含め3回の模擬国連の経験で学んだのは、他の人と違う視点を持つ人は話し合いの中で際立って見えるということである。ただ他人の意見を批判する訳ではなく、会場の雰囲気を俯瞰してみたり、他の大使の発言に対する理解を深めるための質問を試みたり、自国にとって譲れないところを論理的に伝えたりすることが議論の上達への一歩なのだと思う。

「終わってしまった。」それが模擬国連全日本大会最終日、閉会式を向かえたときの私の正直な気持ちだった。達成感も疲労もあったが、何よりも後悔が大きかった。今までに灘高校主催のオンライン会議に二度参加したが、それとは比べ物にならないほど全日本の大会は厳しいものだった。まず、初日の冒頭、動議募集の時点から私たちは会議の雰囲気に完全に吞まれてしまった。特に論点一については時間が押していたため会議が駆け足で進んでしまい、用意していた政策を提案できなかったことが大きな反省点である。タイ大使として主張したかった「多国間協定・地域連携の強化」という内容を盛り込むことができなかった。初日の会議が終わった後、ペアの先輩と会議を振り返り、次の日の動きの相談を行った。その際、反省点を踏まえ私たちは戦略を立て直した。それまではペア二人が同じグループで同じ会議内容を聞いていたが、議論の中心となる決議案の理解不足で積極的に議論に参加できなかった。会議内容を理解しながら、同時に英語で書かれている決議案を把握するのは非常にハードルが高い。そこで、一人が決議案の内容把握に徹することにし、疑問点や対立点を明確にすることができた。その戦略が功を奏し、二日目は初日より会議に関わることができた。私たちは夏休み前から模擬国連大会に向けて忙しいなか準備をしてきた。とてもハードで何度もやめたくることがあったがその中でいろいろ成長できたと思う。今回の大会に関してはまだまだたくさん悔いが残っており、ここでは挙げきれない。しかし、終わった今、大会やそれまでの練習会、そして準備を振り返ってみてとても楽しかったと思えた。あと一年、もっと知識を得て、外部の練習会にも参加し、来年もぜひ参加したい。



令和2年11月21日 尼崎ラウンドテーブル

関西国際大学尼崎キャンパスにおいて、創造科学科5期生(1年)4名が、関西国際大学高大連携センター主催「尼崎ラウンドテーブル」に参加した。「希望はどこから生まれるのか」というテーマについて、関西の50名ほどの高校生が対面で、オンラインで同じく約50名が対話した。



<生徒の感想>

今回のディスカッションからこんなことを考えた。

①希望を考えるには対義語っぽい絶望を考えてその逆を攻めていけば良いのではないかな。②絶望したときは人に相談する。あえて自分と考えの違う人に相談する。③考えが同じ人が集まってなにかプロジェクトを進めるより違う人が集まっている方が難しいが得るもの大きい。④自分と考えの違う人と話すときは自分の考えを主張する前に相手の立場に立って相手の考えについて考慮すれば互いに理解しあってことを進められる。この④

について聞いたことはあったがこれが希望の対話から出てくるとは思わなくてディスカッションは面白いと思った。 尼崎でのイベントということで勢いだけで参加したにも関わらずとても有意義な時間を過ごすことができたように感じた。「希望」というとてもアバウトなテーマだったが、対話を通じて他人と感性が異なる部分も知れたし、逆に共通点も見えた。普段から哲学は好きなので、楽しく話し合いができた。他校の学生との交流というこの時期では難しい事もできたので、とてもいい経験になったと思う。



令和2年11月22日 第10.1回長田区高校生鉄人化まつり

新長田若松公園鉄人広場において、KOBET鉄人PROJECT主催「第10.1回長田区・高校生鉄人化まつり」が開催された。このまつりは、平成22年度に長田区主催の「第2回鉄人まちづくりイベント」に応募した創造科学科の前身である総合科学類型1期生の提案が最優秀賞を受賞し、長田区に所在する高校のさまざまな活動発表の場として実施されるようになったものだ。本校創造科学科4期生（2年）4名と育英高校の生徒会、神戸野田高校の生徒会とで実行委員会を組織し、企画、運営を行ってきた。3月に実施予定だった「第10回長田区・高校生鉄人化まつり」は、新型コロナウイルス感染拡大にともなう休校措置により中止となった。その後、鉄人広場に「鉄人スクエア」が設置され、その活用募集に本校創造科学4期生が応募し、企画が採用された。今回は実行委員長を神戸野田高校と本校生徒が共同で担うことになった。テーマは、第10回を引き継ぎ「RE:鉄人とつくるキセキ」だ。本校からは、書道部、ギターアンサンブル部、吹奏楽部が出演した。天候に恵まれ、プログラムのすべてを実施することができた。



<生徒の感想>

今日1日を一言で表すなら、あっという間だった。楽しい時間は早く過ぎる、というものだろうか。準備した期間が長かったためだろうか。今思い返せば第10.1回の企画を考え出したのは7月ごろだった。私たち実行委員は夏休み中、ずっと鉄人化まつりのことを考えていたと言っても過言ではないと思う。部活の前後にパソコン室にこもって議論を続けた。話し合いも一進一退で思うように進まないことが多かった。やっとの思いで企画書を完成し、10月に第10.1回鉄人化まつり実行委員を組織した。私は実行委員長となり、会議の司会を務めた。会議には兵庫高校だけではなく、育英高校、神戸野田高校も参加した。皆でどのようにすれば成功に近づくか沢山話し合い、会議が終わるのはいつも遅かった。会議で話し合えなかった部分は宿題とし、各校で割り振った。皆、鉄人化まつりを成功させるために必死だった。私はまつり前日までずっと不安な事が2つあった。1つ目は天気だ。この祭りは今までとは違い、雨天中止であった。雨が降れば今までの準備は全て水の泡になってしまう。毎日天気予報をチェックしていた。もう1つは感染の拡大時期だ。第10回が中止になった理由でも

あり、いつ緊急事態宣言が発令されるか分からないという恐怖があった。今回の祭りでは無事晴れて、実施する事ができ、本当に嬉しかった。例年までの鉄人化まつりとは一味違う祭りだった。先輩から繋いでいる鉄人化まつりを違う形で無事開催する事ができたのは、先述したような実行委員の頑張りと、先生方の補助、様々な部活動の協力があったこそだと思う。感謝の気持ちでいっぱい。また、後輩にもこれからこの祭りも参考にしながら新しい祭りを作っていってほしいと思う。

令和2年12月3日 高校生ボランティア・アワード2020 WEB大会

本校創造科学科4期生(2年)3名が公益財団法人風に立つライオン基金主催「高校生ボランティア・アワード2020 WEB大会」に参加した。生徒は昨年度の創造基礎Bの活動をまとめたものを応募した。今回はオンラインでの大会で、各校の生徒が本大会の賛同者と交流したり、アワードの成果を共有した。本校生徒は惜しくも受賞は逃したものの、神戸・長田の取り組みを振り返る良い機会となったとともに他校の取り組みから刺激を受けることができた。



<生徒の感想>

私たち兵庫高校創造科学科四期生の創造基礎Bの活動の集大成をポスターと動画にまとめ、ボランティア・アワードに出展した。本日はその表彰式とシンポジウムが行われた。シンポジウム中の、「ここに居る高校生全員が同じ方向に進んでいくととても大きい力になる」という言葉がとても印象に残った。ここにいる高校生でなくとも、兵庫高校創造科学科4期生がひとつの物に向かって突き進んでいけば大きい力となるのでこれからも様々な活動に取り組んでいきたい。

令和2年12月20日 ワンワールドフェスティバル for Youth 2020

本校普通科グローバルリサーチと創造科学科の生徒が、ワン・ワールド・フェスティバル for Youth 運営委員会・特定非営利活動法人関西 NGO 協議主催「ワン・ワールド・フェスティバル for Youth 2020」にオンラインで参加した。今回はグローバルリサーチI受講生(1年)の2名がそれぞれプログラムセクション実行委員、イベントセクション実行委員として参加し、オンラインでイベント企画・運営の準備を進めてきた。本番もオンライン開催のため、本部と自宅に分かれて参加し、イベントを運営した。また、創造科学科4期生(2年)の3名が創造応用課題研究「ポストコロナ社会を創造しよう!」で研究の報告を行った。その他、グローバルリサーチI受講生(1年)と創造科学科5期生(1年)が「高校生レポーター」として各企画に参加した。合計約40名の生徒がイベントに参加し、グローバル社会における課題や他校の取り組みについて学んだ。



<生徒の感想>

私が担当した COVID-19 プログラムを完璧に成し遂げることができたなと感じています。このプログラムを通してコロナ渦で自分はよく頑張ったなと振り返ることができ、コロナウイルスが流行することによって自分が少し不満に思っていたことを共有して、自分だけが思っていることじゃないんだなと考えることができました。私はワンフェスユースに参加するまで、NGO という単語を社会の授業で聞いたことがある程度だったのですが、こうやって参加することによって色々な団体が色々な方面で支援をしているんだなということを知れたので、いい経験になりました。もともとボランティア活動に興味があるので、これを機に何か小さいことから始めてみようかと思います。ワンフェスユースに参加して、普通に生活していれば関わることができないような方々と一緒にプログラムを作ることができて、本当に良かったです。